

亀山藩校「明倫館」の額



「藩校明倫館扁額」(複製) ※原資料:加藤尚大氏所蔵

旧亀山藩藩校「明倫館」扁額について

1階エントランスホール(多目的室前に)掲示されている扁額は、最後の亀山藩主石川成之(在任:1865~1871)が、亀山藩藩校「明倫舎」が「明倫館」改称された1869(明治2)年から廃校となった1871(明治4)年までに揮ごうしたものです。

扁額とは、建物などの高い位置に掲げる額のことです。「明倫館」扁額は、江戸時代後期の亀山藩の藩校に掲げられていたとみられるものです。

額全体で縦65cm、横154.5cmで、本紙部分は縦45.8cm、横137.5cmです。「明倫館」の廃校後は、個人の家で代々保存されてきましたが、所蔵者のご厚意により複製許可をいただき、図書館整備にかかる展示物として作成しました。

複製にあたっては、原資料を高感度カメラで撮影し、破れた部分の一部は補正を施しました。これを質感などの雰囲気損ねないように配慮してプリントアウトして簡易額装しました。

旧亀山藩藩校「明倫館」扁額(複製)掲示について

亀山市域では、古くは、室町時代に寺院や有力武将の蔵書群が存在したことがうかがわれます。

江戸時代には、亀山藩校明倫舎(館)に備えられた「明倫館文庫」や寺社や個人蔵書の存在が知られ、明治以降は、明倫館文庫や篤志家からの寄贈図書などを継承して、1928(昭和3)年、亀山尋常高等小学校(現在の亀山市立亀山西小学校)内に「亀山町立図書館」が設けられています。このように市域では「知を集積する」の土壌が早くから形作られていたと言えます。

新しい亀山市立図書館は、この伝統を受け継ぎ、新たな知の集積と発信拠点となることを願って長い歴史を誇る亀山の読書文化の象徴となる「明倫館」の扁額(複製)を掲示するものです。

また、亀山藩藩校「明倫館」は、現在の亀山中学校の地に置かれたことから、亀山中学校の生徒に旧藩校以来の学びの伝統を受け継いでほしいとの願いから、亀山中学校にも額を掲示しています。

亀山藩藩校「明倫舎」(館)について

亀山藩藩校「明倫舎」は、江戸時代後期の亀山藩主石川家が家臣の読書場として、1785(天明5)年に亀山城下南崎(現在の亀山市南崎町)に設立したものです。1825(文政8)年に亀山城内の西之丸(現在の亀山市西丸町・亀山中学校校地)に移設しました。

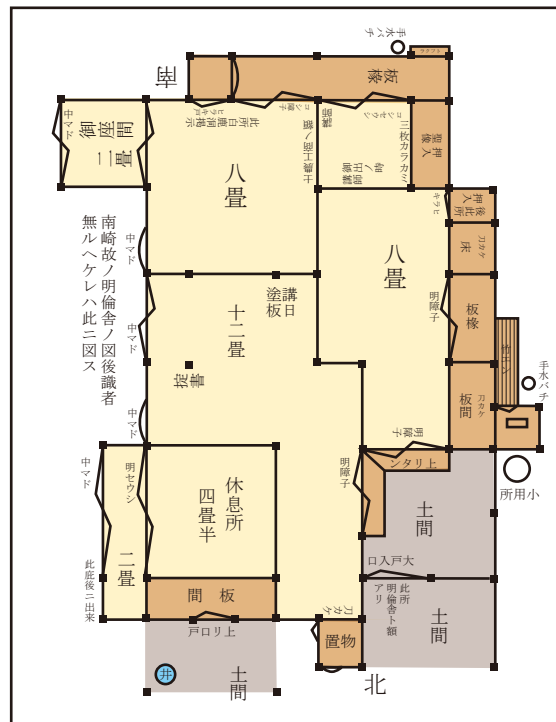
名称の由来は、中国古典の「孟子」(滕文公章句上)の一節である、

「皆、人倫を明らかにする所以なり」

(教育によって人の道を明らかにして教え導けば、みなそれに感化されて互いに親しみあい国は大いに治まる)を採ったものです。

その後、1869年(明治2)年「明倫館」と改称し、1871(明治4)年に廃止されました。

明倫舎には、亀山藩主石川家の蔵書と古今の和漢洋書によって構成される「明倫舎(館)文庫」が成立し、現在もこの一部が歴史博物館に収蔵されています。この「明倫舎(館)文庫」は、その時代に即して多岐にわたる分野の書籍が加えられたものとみられ、その後、1928(昭和3)年に設立された亀山町立図書館に受け継がれ、これを母体として図書館蔵書の充実が図られていきましたので、亀山市立図書館蔵書形成の原点となりうるものです。



明倫舎(南崎読書場)平面図

※「蔡州君遺事」(歴史博物館蔵) 所載図より作成

亀山市立図書館における「明倫館」扁額掲示の意義

(1) 今回複製した扁額は、亀山市域の読書文化の象徴として掲示されること

新しい図書館は、これまで培われてきた亀山市域の長い読書文化を継承し、これを発展させ、次に継承していく役割を担っていきます。この象徴として、亀山市の図書館の原点に位置づけられる「明倫館」の額を掲示し、文化継承という図書館の役割を広く知っていただくものです。

(2) 亀山中学校と図書館に同じ扁額が掲示されていること

掲示している「明倫館」扁額は、その存在自体が城下町亀山の来歴を示す貴重な文化財と位置付けられるものですが、同時に、亀山市における伝統ある読書文化の来歴を示し、「学びのまち かめやま」の象徴となるものです。

この扁額を藩校「明倫館」の旧所在地にあたる亀山中学校に掲示し、亀山中学校生徒に自分たちの母校が伝統ある亀山の学びを継承していることを誇りとしてほしいと願うとともに、学校と同じ扁額が図書館にもあることから、新図書館への興味関心を抱き、より一層の読書活動推進につながってほしいとの願いが込められています。



亀山中学校に掲示された「明倫館」扁額